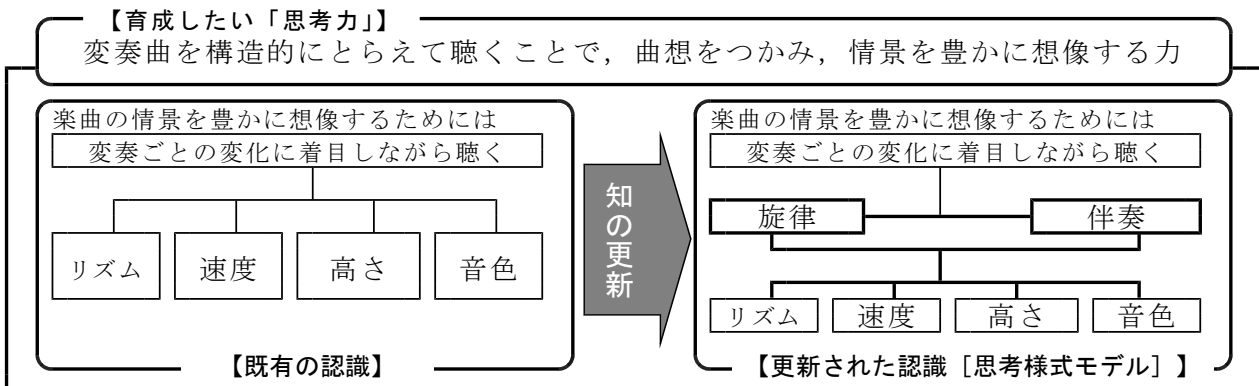


4 思考様式を共有化するユニバーサルデザインの授業の実践

「情景を思い浮かべながら聴こう ―ピアノ五重奏曲第4楽章『ます』―」（第5学年）

（1）本実践の目標構造



本実践前の子どもたちは、変奏曲を鑑賞する際、音楽を形づくっている要素を根拠に変奏ごとの変化を感じ取り、そのよさや面白さを感じ取ることができるようになりつつある。しかし、子どもたちが根拠としてとらえているのは印象に残った場面のリズムや速度、高さ、音色といった要素であり、それらのかかわり合い方までには着目できていなかった。そのような認識が更新されたのが、上記思考様式モデルである。まず、旋律や伴奏の中に含まれる音楽を形づくっている要素に着目して聴くことで、それぞれの表す情景を想像することができる。さらに旋律と伴奏のバランス、音色の重なりなどのかかわり合い方をふまえて楽曲全体を構造的に聴くことで、これまでばらばらだった2つの情景を1つのまとまったものとしてとらえることができる。そうすることで、これまでよりもさらに曲想をつかみ、情景を豊かに想像しながら音楽鑑賞ができるようになる考えた。

（2）思考様式を共有化する言語活動

① 集団吟味による「承認・合意」

子どもたちは主題と第1変奏を比較して、ますの様子だけではなく、川など周りの様子も一緒に聴き取っていけばよいことを意識し始めていた。そこで、それらを聴き取る際に、音楽のどこに目を付ければよいのかについての意見を出させる。これまでの学習を振り返り、ますを旋律から、川を伴奏から聴くことで楽曲の情景を豊かに想像することができることを想起させていくことにしたのである。

② 体験の言語化による個の「実感・納得」～ユニバーサルデザインの働きかけ～

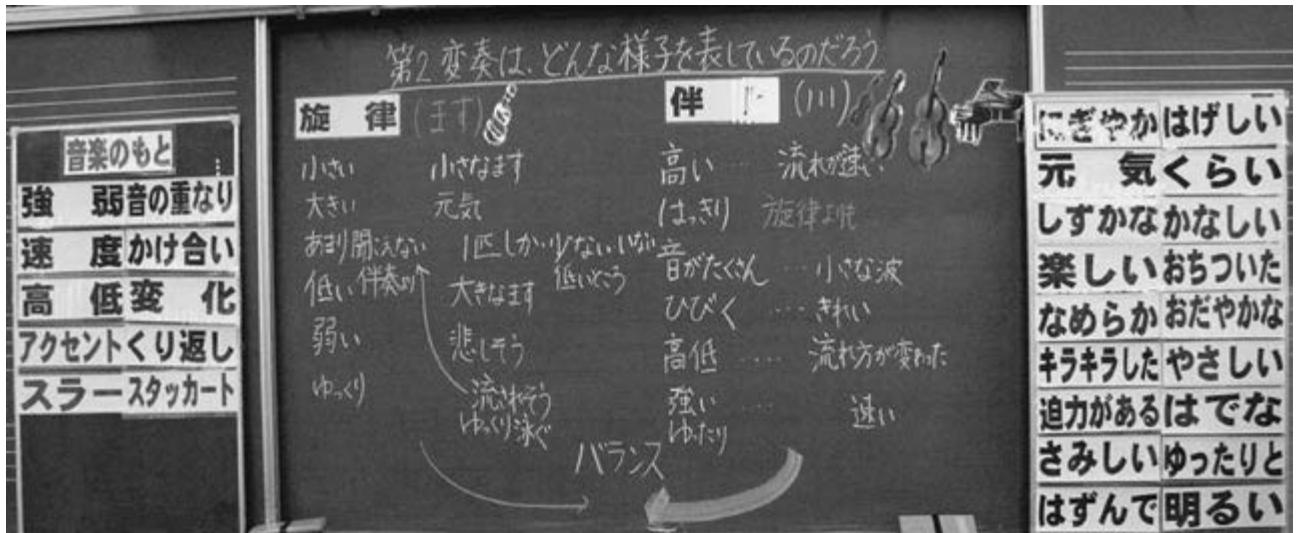
感じたことを絵と文で表すことにより、変奏ごとの変化に着目し、情景を豊かに想像しながら聴く。

単元の導入段階において、「ピアノ五重奏曲『ます』第4楽章」の変奏を全て聴かせたところ、ワークシートには、印象に残った要素のみから各変奏の変化をとらえた記述が多く見られ、子どもたちは楽曲の一部分しか味わっていないということが考えられた。そこで、楽曲全体の曲想をとらえ、情景をより豊かに想像することができるよう、以下のような働きかけを行った。

子どもたちは自力解決において、ますの様子は旋律から、川の様子は伴奏から聴き取り、ワークシートに簡単なイラストで描き表し、その根拠となる要素を2色の付箋に書き出す。その後、イラストを表す端的な文章として、「ます作文」を書くようにした（「視覚的手がかり」と「言語的手がかり」の指導方略の組み合わせ）。この「ます作文」は、旋律と伴奏両方の視点から曲想をとらえ、2つが重なり合って醸し出す曲想を一つの情景として想像することで初めて書くことができるものである。そうすることで、一人一人が思考様式のよさを「実感・納得」できるようにした。

(3) 学習指導の実際

① 本時の板書



② 「思考様式を共有化する言語活動」の詳細

ア 見通しの場面

第1変奏を鑑賞する際、主題と比較してますの動きがどのように変化していったのかを聴き取った。子どもたちは、ピアノが高音で細かい音符を奏でているところから、「主題よりもますの数が増えたみたい。」「家族で楽しそうに泳いでいる。」と、ますの様子をイメージしていった。一方、「バイオリンがなめらかに演奏しているから、川の流れはゆったりとしていて静かな感じ。」と川の様子をイメージしていった。そして、それらを板書上に整理していくことで、ますの様子は旋律から、川の様子は伴奏から聴いていくと変化がよくわかることを「承認・合意」させることができた。

イ 自力解決の場面

主題と第2変奏を比較して鑑賞した後、ますと川それぞれの変化をイラストに表した。すると、第1変奏で描いたますや川とは大きな変化が見られた。第1変奏では何匹ものますと、ゆったりと流れている川を描いた子どもが多かったのに対し、第2変奏ではますの数が減り、川の水量を増加させた子どもが多く見られたのである。そこで、その根拠を音楽に求め、どのような表現からそう感じたのか、音楽を特徴付けている要素からの気づきを2色の付箋（旋律…ピンク、伴奏…黄色）に書き表していった。すると、「伴奏は主題より音が多くなって、音のはっきりしているから大きな川だと思う。」「伴奏は細かいリズムが目立っていたから、川が波立っているような感じがする。」というように、伴奏が表す川の様子についての発言がますよりも先に表出された。このように目立っている伴奏ばかりに意識が向けられ、気づきの付箋が1色のみの子どもや、さらには、旋律と伴奏を逆にとらえている子どももいた。このような子どもたちに対して、次のような働きかけを行った。



【第1変奏を表したイラストと付箋】

まず、2回目の鑑賞の前に旋律と伴奏を別々に録音した演奏を聴かせた。2つの音色の違いに気付かせ、どちらの音も聴き取らせるような支援を行ったのである。次に、音楽を特徴付けている要素をまとめた小黒板を示し、付箋に書く視点に気付かせた。そうすることにより、2回目の鑑賞以降は、「旋律の音は低いので、悲しそうに川の底の方を泳いでいる。」「旋律に比べると伴奏が大きいすぎて、ますは川の流れに飲み込まれている。」などの意見が出された。



【第2変奏を表したイラストと付箋】

ウ 振り返りの場面 ～イラストと「ます作文」を合わせて情景を想像する～

ここまでの学習で、旋律と伴奏からますと川の様子を詳しく聴き取ることができるようになってきていることが感じられた。しかし、まだ一つの情景として想像するまでには至っていなかった。そこで、ますと川の様子を一文にまとめた「ます作文」を書くことにした。このような体験の言語化から、旋律と伴奏が重なり合って醸し出す一つの情景を想像できると考えたのである。その際、以下のような反応が見られた。

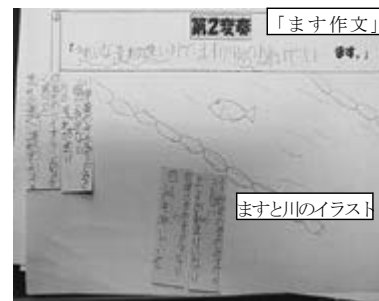
T:「イラストで表したますと川のことをまとめて『ます作文』にすると、第2楽章の様子を詳しく聴けましたね。

『ます作文』に書いたことを教えてください。」

C1:「伴奏が大きくて、旋律はビオラだけだったので、『流れの速い川で、ますが一匹で静かに泳いでいます』にしました。」

C2:「伴奏が高い音でリズムが細かくなっていたので、『流れの速い川で、ますが疲れてゆっくり泳いでいます』にしました。」

C3:「旋律が低くて、小さい音だったので、『きれいな川で、ますが岩陰に隠れながら泳いでいます』にしました。」



【イラストと「ます作文」で表す】

さらに、本時の気付きと、鑑賞第1回目のワークシートを比較し、自分の聴き方を振り返る場を設定した。このような活動を通し、音楽の変化と情景が結び付けられていなかった子どもが、情景と音楽の変化を結び付けながら鑑賞することができるようになってきた。

(4) 成果と課題

① 量的・質的な検証

本実践の前後でテスト（9点満点）を行い、「思考力」の伸びを検証した。その結果、平均点で0.41点向上した。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた[t(38)=2.05, P<.05]。思考様式の広がりに関しては、本実践の前後で比較して8名から21名に増加した。

また、以下のような授業後の感想から、質的には高位群に有効に働き、低位群には課題が残ったと言える。

高1児: 1回目の鑑賞では曲全体をまとめて聴いていたので、あまり詳しく聴けませんでした。今日は旋律と伴奏を分けて聴いたので、詳しく聴けたと思います。

高2児: 前は目立っている音しか気が付かなかったけれど、ますや川の様子を想像していたので、曲を詳しく聴けました。

低1児: 旋律が聞こえなかったもので、ますがいなくなりました。

低2児: 強弱の分かりやすいところを聴くと、ますや川の様子が分かりました。

② 考察

量的な検証から、イラストで感じ取ったことを言語化した「ます作文」は「旋律と伴奏の両方から鑑賞する」という思考様式の共有化に一定の効果があったと言えるだろう。しかし、質的な検証から、低位群の子どもたちには旋律と伴奏両方から聴き取ることが難しかったようである。旋律と伴奏を別々に聴く支援を行ったが、低位群の子どもは伴奏に遮られて旋律を聴くことができなかったのである。今後は、全員が主題を口ずさめるくらい繰り返し鑑賞し、曲に浸る体験、味わう体験を充実させていく必要がある。